

新英語カリキュラム開始初年度

ー 現状とその課題 ー

齊藤 眞美・ドッズ アーロン・寺澤 君江

本 FD は、2022 年度から運用が開始された新英語カリキュラムにおける新規開講科目の現状と今後の課題について、グローバルラーニングセンター内で共有することを目的に実施された。FD を通じて現状及び課題が共有され、2023 年度に向けてオーラルコミュニケーション重視の英語教育をさらに推進していく方向性が確認された。

キーワード：コミュニケーション英語，資格英語，TOEIC，選択科目化，
オーラルコミュニケーション重視

1. 本 FD の目的及び背景

本稿は、2022 年 11 月 2 日に山梨学院大学グローバルラーニングセンター（以下、GLC）で、GLC 常勤教員を対象に、英語セクションの活動を紹介し教員間で共有する目的で実施された FD 「新英語プログラムの現状と課題」の内容を報告するものである。

山梨学院大学では、2022 年度より、外国語教育科目である英語、中国語、日本語のうち、外国人留学生対象科目である日本語を除く英語及び中国語が、選択必修科目から選択科目へと変更された。これは、一律の英語科目（必修科目であった「英語Ⅰ・Ⅱ」等）を履修しなければならないという制約を取り除き、学生自身の目的やニーズに応じた科目選択を可能とするカリキュラム設計を行うという大学の方針による。また同時に、よりオーラルコミュニケーションを重視した英語教育へと転換する方針も示された。これらの方針を受け、GLC 英語セクションでは、英語カリキュラムの改編²⁾を行い、2022 年度より運用が開始された。FD では新規科目である「コミュニケーション基礎英語」、「コミュニケーション初級英語」、「資格英語（TOEIC）Ⅰ」、そして必修科目であった「英語Ⅰ・Ⅱ」の流れを汲む「総合英語Ⅰ・Ⅱ」について現状と課題の報告があった。本稿では、紙幅の都合上、新規科目である「コミュニケーション基礎英語」、「コミュニケーション初級英語」、「資格英語（TOEIC）Ⅰ」について、現状及び課題を報告する。

2. コミュニカティブ基礎英語 A・B / コミュニカティブ初級英語 A・B

2.1. 科目の概要及び特徴

これらの科目は、国際リベラルアーツ学部（iCLA）を除く全学生を対象とした選択科目として 2022 年度新設された。初年度はある程度基礎力のある学生を対象とするため、各学期開始時に実施された英語力確認テストの得点が、70～84 点の者には「コミュニケーション基礎英語 A・B」、85 点以上の者には「コミュニケーション初級英語 A・B」の履修を推奨した。この他、初回以降の

新英語カリキュラム開始初年度—現状とその課題—

授業で担当教員によるオーラルコミュニケーション力チェックも行われ、両者の結果により履修指導が行われた。科目名の「A・B」は、Aが前期、Bが後期科目であることを表しており、いずれからも履修を開始することが可能となっている。

一連の科目の担当者である筆者（ドッズ）は、授業の中で7つのC、即ち Challenge・Community・Contribution・Creativity・Collaboration・Courage・Curiosity を重視する。これらを「7Cs」と呼び、授業活動の中で学生に意識するよう促している。7Csは、言語習得に際してあるべき学習姿勢を簡潔に表現しているもので、授業での学習が進むにつれ、学生にも次第に認識されるようになった。また授業外でも学生がこの7Csを意識して英語学習に取り組むよう指導している。

これらの科目の評価は、2つのスピーキングテスト（40%）、各ユニットの語彙クイズ（20%）、クラス活動への参加度（20%）、English Cafe Lesson（20%）とした。授業中の自発的な発言を奨励し、毎回の授業でこれらをカウントし、「クラス活動への参加度（20%）」に反映させた。English Cafe Lesson（以下、ECL）とは、学生が自分のレベルやニーズに合わせ、経験豊富で親しみやすい英語話者の講師と1対1で行う英語レッスン（1回30分）で、正課外活動の一つとして設置されている。「オーラルコミュニケーションを重視した英語教育」を実践するため、本科目をECLと連動させ、授業外でのコミュニケーション力育成手段として活用した。具体的には、1学期間に8回ECLを活用することとし、上記の通り評価に含めた。

2.2. 今後の課題

2023年度に向け取り組むべき課題は、継続して履修する学習者を増やすことである。2022年度は、前期に比べ、後期の受講者が減少した。前期終了時のアンケートは概ね良好であったので、予想外であった。理由として考えられるのは、本科目の授業レベルが高いと感じた学生がいたこと、また高校までの英語学習以上に本科目では口頭での意思表示を求められることに適応しきれなかったことなどである。今後は学生が感じていたと推測される心理的ハードルを下げる工夫を行っていきたい。

3. 資格英語（TOEIC）IA・B

2022年度より、前期に「資格英語（TOEIC）IA」、後期に「資格英語（TOEIC）IB」が選択科目として新設された。今年度の履修者は、それぞれ57名、35名であった。以下、2022年度の状況と今後の課題を報告する。

3.1. 2022年度の状況

本節では、履修者の実態、及び学習方法や授業内容を示し、履修者の「TOEIC Program IP テスト（オンライン）」（以下、TOEIC IP）³⁾の結果から実績を述べる。

まず、授業履修者の履修目的及び英語レベルについて説明する。前期授業開始直後に筆者（寺澤）が行った調査では、53%の学生が履修目的に「就職活動や履歴書記載のため」を挙げており、TOEIC学習の主たる目的がキャリア形成の一環であることがわかる。続いて18%を「英語の学習として」が占めている。このほか少数だが、「実力を知り、さらに向上したい」や「同じ授業料であれば、学びを増やしたい」などの回答から、大学生活の本来の目的に向かう真摯な気持ちが感じられた。また、履修者の英語レベルについては、先述の調査と同時に実施したTOEIC IP

の結果から、日常でのコミュニケーションが成立可能な基礎的・基本的な英語力が定着していると判断される。さらに、複数の高得点者も履修しており、習熟度の差の大きい学習集団だと言える。これらのことから、担当教員として目標スコアの設定が困難だったが、中間層をターゲットとし、550点を達成目標とする授業構成とした。

次に、学習方法及び授業内容について述べる。TOEICの100点上昇には約225時間の学習時間が必要とされる(Trew, 2007)。授業時間は合計22.5時間であるため、これには及ばないが、UNIPA(本学のLMS)のテスト機能の利用やECL⁴⁾により、構造的には授業も含め、全体として約60時間の学習時間を確保することができた。また、授業では、比較的得点しやすいリスニングパートの問題演習及びリーディングパートの短文問題演習に重点を置いた。語彙力や文法力については、事前・事後学習及びフィードバックにより定着を図った。

続いて、スコアの上昇について述べる。シラバスには明記されていないが、TOEIC IP「100点アップ」を合言葉に授業を進めた。結果として、TOEIC IPを2回受験した37名のうち9名(24%)がその目標を達成した。またスコア分布の中央値の範囲が50点上昇しており、全体としてもスコアが上昇している。スコアの大きく上昇している履修者に聞き取り調査をしたところ、「ECLでの会話練習が役立った」という声が聞かれた。実際、単位修得者の76%が期間中にECLを8回以上利用し、前期授業終了直後の自由記述調査では、回答者の84%がリスニング力やスピーキング力の向上に役立ったと述べている。授業外での学習が意欲の継続につながったと言えよう。

3.2. 今後の課題

今年度の「資格英語(TOEIC)I」の授業実績から2つの課題を挙げたい。まず、人材育成の視点から述べる。就職活動の際、企業から明示されるTOEICの到達スコアについて、一般的な大学生は目安として600点程度が、グローバルに活躍できる人材は目安として730点程度が求められる⁵⁾。従って730点を目標としたいところであるが、目標が600点と730点とでは、扱う教材や指導方法も異なるため、同時の指導は難しい。よって、履修者の目的を尊重するのであれば、さらに上位科目の設置が求められる。さらに、全体としての英語学習に対する意識の向上も課題として挙げたい。本学では、一部の学生を除き、全体としてTOEICに限らず英語学習そのものに興味関心の高い学生が少ないと感じる。今後は、上述の履修目的調査結果を参考にTOEICを広めていくという方法もあるだろう⁶⁾。そうすることで、結果として、英語学習への意識が全体的に高まるのではないだろうか。

4. まとめと今後の展望

本稿では、2022年度に新規開講した英語科目のうち、①「コミュニケーション基礎英語A・B」ならびに「コミュニケーション初級英語A・B」、②「資格英語(TOEIC)IA・B」の現状及び課題を報告した。①の課題として、履修継続者数の増大が挙げられた。後期に履修者が減少する傾向は、英語と同様に2022年度から選択科目となった中国語でも見られた。「履修する学生があたりまえにいる」という必修科目の担当に慣れてきた教員にとり、科目が選択化となったことで生じた新たな課題である。今後はGLC全体で連携し、科目に関する情報提供等を行い、履修を促進していく必要がある。②の課題は、到達目標スコアと英語学習意欲についてであった。到達目標スコアについては、2022年度に受講者のスコア分析がはじめてなされたことが、まずは大きな成果

新英語カリキュラム開始初年度—現状とその課題—

の一つであったと言える。引き続き、教育実践と結果分析を重ね、効果的な指導方法の開発と適切な到達目標スコア設定とをセットにして取り組んでいきたい。英語学習意欲については、GLC 教員間で連携し、正課科目、正課外活動、留学等に関する情報提供をより積極的に行っていく。TOEIC 等の資格については、2022 年度より開始した YGU グローバル・エキスパート認定⁷⁾でポイント対象となることから、2022 年度より取得状況調査も開始された。こうした GLC 全体の取り組みの中で、英語に対する意識も徐々に高めていきたい。

2023 年度には、①の上位科目である「コミュニケーション中級英語 A・B」と、②の上位科目である「資格英語 (TOEIC) II A・B」が開講する。改編初年度である 2022 年度の教育実践を踏まえ、課題解決に取り組みながら「オーラルコミュニケーションを重視した英語教育」の推進に、引き続き取り組んでいきたい。

注

- 1) FD は、本稿執筆者のドッズ・アーロン特任講師、寺澤君江特任講師の他、秋田辰巳教授が担当した。
- 2) 英語科目の改編については、齊藤・トンプソン (2022) を参照されたい。
- 3) TOEIC Program IP テスト (オンライン) は、場所や時間を問わず個人や集団で受験可能なオンラインテストである。「資格英語 (TOEIC) I」の履修者は授業期間中に 2 回受験する。2022 年度、本学では就職・キャリアセンターが手続きを担当した。
- 4) 「資格英語 (TOEIC) I」では授業外学習として、履修者には授業期間中に 8 回の ECL 受講を課している。
- 5) 「TOEIC エクステンション」(注 6 参照) 外部講師 (国際ビジネスコミュニケーション協会) からの説明による。
- 6) TOEIC への理解を促す目的で、筆者 (寺澤) は 3 回シリーズの「TOEIC エクステンション」を企画・実施した。各テーマは第 1 回 (10 月 4 日開催) が「TOEIC を『知る』」、第 2 回 (11 月 22 日開催) が「TOEIC に『親しむ』」、第 3 回 (12 月 20 日開催) が「TOEIC から『学ぶ』」であった。開催にあたり、国際ビジネスコミュニケーション協会から協力を得た。
- 7) YGU グローバル・エキスパート認定については、トンプソン (2022) を参照されたい。

参考文献

- Grant Trew (2007). *A Teacher's Guide to TOEIC® Listening and Reading Test Preparing Your Students for Success* (p.6). Oxford: Oxford University Press
- 齊藤 眞美・トンプソン 美恵子 (2023). 新英語プログラムを知る—英語カリキュラム改編の骨子—国際共修・語学教育実践, 創刊号, 29-32. <http://id.nii.ac.jp/1188/00003930/> (2023 年 2 月 11 日)
- トンプソン 美恵子 (2022). YGU グローバル・エキスパート認定 国際共修・語学教育実践, 創刊号, 29-32. <http://id.nii.ac.jp/1188/00003926/> (2023 年 2 月 11 日)

SAITO Masumi・DODS Aaron・TERAZAWA Kimie